



85年横濱、左から2番目が佳美さん



82年の海外旅行。左端が佳美さん

後列のひと⑤

清武英利きよたけ ひでとし
作家 ノンフィクション

後ろの列の目立たぬところで人や組織を支える人々の物語



筒井氏と妻・陽子さん

人は自分で考えているよりも十倍の力を持っている

筒井宣政
(東海メディカルプロダクツ会長)

「講道館柔道四段」が、筒井宣政のほまきの自慢の一つで、名古屋の私立東海高校柔道部のころには、プロレスラーとなったサンダー杉山らとともに、全国制覇を遂げている。

地頭じあたまは良いのだが、中学、高校と柔道に打ち込みすぎて、受験勉強は物理や数学まで手が回らず、関西学院大学では経済学部に着いた。きかん気と頑健な体軀は一見して体育会系、学歴は文系である。

は億万長者になりますから」

ママは目を丸くした。

だが実際のところ、筒井は追い詰められている。彼が社長、妻の陽子が専務の「東海メディカルプロダクツ」は、企業育成センターから債務保証を受けたたり、ベンチャー助成金をもらったり、通産省系の技術改善補助金や公的融資を集めたりしている。そのうえに銀行から借金を重ね、合わせると九億八千万円にも達していた。人工心臓と医療器具の開発に注ぎこんでいたのだった。

「絶対うまくいきます！」

誰に会ってもそう宣言してきた。だが手掛ける医療器具は繊細で、最後のところで壁に突き当たり、目の見なかった。

(借金が十億円になったらやめろしかない)と筒井は思い始めている。家財すべてを売っても追いつかない。その弱気を、「やめられるもの

それがいま、理系脳を総動員して、深夜の洋風居酒屋の隅で考え込んでいた。町工場から、日本初の医療機器を作り出そうと苦しんでいたのだった。アイデアを求めて自宅を抜け出し、闇の住宅街に一軒だけあかりを灯したそこにいる。自宅で唸ったり家の中を動き回ったりしていると、家族が心配するからだ。注文したウイスキーの水割りには口をつけなかった。宙を見つめてい

か」という反骨心が、危ういところを抑えていた。それは二女の佳美よしみを救うために始めたのである。

一億五千万円の借金

佳美は一九六八年に生まれている。日本は高度成長の途上にあっただ。『こんにちは赤ちゃん』の大ヒット曲がその四年前、選抜高校野球の入場行進曲として甲子園球場に流れており、青空の下で弾んだあの歌声のように、祝福された生だった。

だが、病院のベッドに陽子を休ませると、産婦人科医は筒井を新生児室に呼んで、聴診器を手渡した。彼は二十六歳、陽子は二つ年下だ。

「赤ちゃんの心臓がひどく悪いですよ。雑音があります。これを心臓のところ当てて聞いてみてください」カクンコ、カクンコ」。波打

たかと思うと、メモ帳を凝視してぶつぶつとつぶやいている。

「おたく、なにやっとなんでですか？」いつの間にか、店のママが傍に立っていた。音楽と客の喧騒が筒井の耳に戻って来た。

「ああ、いまね、心臓を治す器具を考えとるんですわ。夢中になってしもて」

「うるさいでしょう」

「いや、これ、うまくいったら、私

つ心音の合間に、「ザザザ、ザザザザ」という音のはっきりと聞こえた。心臓が異常であることは素人もわかった。

「長くは持たないかもしれませんが」

医師の声を、彼は茫然と聞いた。しかも、新生児なので精密検査に体が耐えられない。成長を待つしかない、というのである。

筒井は人間の力を信じている。人は自分で考えているよりも十倍の力と耐性を隠し持っているのだ。だがそれは後年になって体得したことで、このときは仕事でも窮地に立たされていた。父親から引き継いだ樹脂加工工場が、一億五千万円近い借金を抱えていたのである。

内情を知ったのはこの二年前、新婚旅行から帰国した夜のことであった。両親が羽田空港に来ていた。若い夫婦は顔を見合わせた。——なんで親父が迎えに来てるんだ

ろう。

陽子は、叔父が支店長を務める東京銀行（現・三菱UFJ銀行）の元秘書で、ぱっちりとした大きな瞳の美人だったから、縁談が小学生のころからあった。それをまるでストーリーカーまがい、強引に口説き落として筒井家に来てもらったので、昔気質の父までが敬意を表して東京まで迎えにきたのか？

父親は名古屋の自宅の庭で「東海高分子化学」という小さな会社を経営しており、長男の筒井は大学卒業と同時に入社していた。新婚夫婦を銀座の寿司屋に連れて行くと、父は小声で「ノブマサ、ちょっとこっち来てくれ」と隅の方へ呼んだ。

「実はな、引っかけたわ。千六百萬ぐらい」

取引先が倒産して、受け取っていた手形が不渡りになったというのである。

に相手にされず、訪ねた大阪の小さな商社マンから、アフリカに行け、と助言されていた。

「あそこならきつと売れるわ。そんなにええもんやと熱心に言うんなら、あんたが売りに行かなあかん。あんたが行けば応援をするわ」

「僕はモノは作れるけど、商社みたいなことはできん。知ってる英語なんて」*What's your name?*ぐらいですよ」

つべこべ言ったものの、(ひよつと)したら七十二年かかる借金が、半分で返せるかもしれない)と考え直した。思い立つと体が動く質なので、間もなく結いひもを入れたバッグを抱え、真夏に一人でナイジェリアへと発った。

家族は空港まで見送りに来た。二歳になる佳美も一緒である。夫に手を振りながら、陽子は不思議に不安を感じなかった。何とかなるのだらう。

「えー！」。町工場の最終利益は毎年二百万円ほどしかなかった。

父は頼られるとイヤとは言えぬ親分肌である。借金の保証人を頼まれると次々に引き受けていた。戦前は昭和の浪曲師・広沢虎造のレコードを制作して大儲けし、戦時中はゴム会社に変えて飛行機のパッキンなどを造っている。戦後に入ると、ビニールのハンドバッグやチューブ類、縄跳びのひもを造って、儲かれば「飲めや歌え」で散財した。

一時は女性の面倒も見ていて、筒井に運転させてはそこに通っていた。筒井は何も知らなかったのだが、やがて母親にばれた。「男なんてのはどうしようもない。親父もあんたも同じ穴のむじなだ」と、しばらく口もきいてもえなかった。

男冥利のベンチャー人生だったのである。だが、父のお人好しと出し惜しみのない経営がこのころ、次々

う、と思っている。育ちの良い鷹揚さが、彼女には備わっている。

「病氣も私が治してあげる」と、子供たちの手を強く握った。

二か月半後に筒井は帰国してきた。「話せば長い。一週間は聞いてもらわんとな」とギラギラした目で言った。

「現地のバイヤーのところは一週間以上も通い、身振り手振りで訴え、バイヤーの祖母の葬儀に参列して祈り、酒を飲み、踊り、デンデン虫の塩ゆでから猿の脳みそまで一緒に食べた」と言う。興奮冷めやらぬ話のなかで、乾坤一擲の輸出話をまとめ上げてきたことと、彼のビニールひもが、現地女性の縮毛髪をまとめるのに重宝されたことはよくわかった。

そのひもは小さく髪をまとめると花が咲いたように可愛く、風通しも良かった。しかもアフリカ女性は一人で十〜十五本のひもを使ってくれ

と裏目に出て、借金がとうとう一億五千万円に膨らんだというわけだ。——うちのもうけの七十二年五か月分やないか。このままなら百歳近くにならないと返せん。

楽天的な父親が、「もう俺はやらんから社長をやってくれ」と言い出したのは、借金の工面にも疲れ、年貢の納め時だと思ったのだろう。それでも「社長」と呼ばれ続けたのは、筒井が「親父が創設者なんだから、つぶれようとうとうしよう」と、最後まで社長をしとればいいじゃないか」と言ったからである。

ファッションブームを起こす

借金を知って四年後、筒井はナイジェリアの炎熱都市・ラゴスにたどり着いていた。工場で作ったビニールの髪結いひもを、アフリカ第二の都会に売り込みに来たのだ。大商社

る。売れに売れて、現地でファッションブームを巻き起こした。彼しか造っていない物だから、独占販売で、それも頭の数の十倍も売れる。

それに気付く人や現地に乗り込もうという商人がいなかったのである。

同じ愛知県出身で、「トヨタ中興の祖」と呼ばれる石田退三(三代目社長)が、「田舎者のええところといえ、なによりも純粹と勤勉である」という言葉を残している。石田は地方者の美質を語り、そこに根を張ってがむしゃらに知恵を出せとい

った。

「田舎者はひたすらに直進する。骨惜しみをしない。苦勞をいとわぬ。しぶとくて、ガメつくて、欲が深く、何事にも真つ正直である。それではいさか世間を狭うするじゃないかと、心配してくれる向きもあるうが、しかし、そこにはまたひたむきな人一倍の勉強心もあるのではあ

る」(石田著『トヨタの商売 成功の7原則』ワック)

石田の言う通りに、筒井がしぶとく直進した道の先に、町工場の復活があった。そして、父親の炎熱商戦が佳美と家族の希望となった。

筒井のビニールひもは右肩上がり輸出量と売り上げを増やし、借金を返しながら、貯金は増えていった。蓄えはそのまま佳美の手術費用となるはずである。

人工心臓を一から作る

貯金が二千万円を超えたところだった。佳美は九歳になり、精密検査を受ける体力もついた。ところが、最先端の国立循環器病研究センター(大阪)の宣告は非情なものだった。「佳美さんは三尖弁閉鎖症という難病です。心臓の三尖弁という弁が先天的に閉じているうえ、心臓に穴が

開いています」

心臓は全身から還ってきた血液を肺に送って酸素を取り入れ、再び全身に送り出している。ところが彼女の心臓は、ポンプである右心房と右心室の間にある三尖弁が閉じて血液が正常に流れない。肺動脈も欠損して、肺高血圧症も併発していた。

「現代の医学では手術は不可能です。このまま温存すれば十年ほどは生きられるかもしれませんが」

陽子は、専門医の言葉をはねつけた。外に遊びには行けないが、佳美は私のそばで洗濯物をきちんと畳んだり、キッチンで洗いの物を手伝ったり、しっかりと生きていくではないか。そんなわけがあるものか。

筒井は米国の病院にもカルテを送り、治療の方法を模索した。だが、返ってきた答えはやはり、「不可能」であった。しばらくして、陽子は筒井に言った。

決めて、陽子に「やっぱりお前の言うようにするよ」と告げた。ところが、紹介を受けて寄付の話を、東京女子医科大学病院の医師に告げると、思いがけない提案が返ってきた。

「このお金で一緒に人工心臓を作りませんか」

「えっ、人工心臓ですか」
そのころ、アフリカへの輸出は円高のおおりで利益が減り、筒井は医療分野への事業展開を思案していた。例えば、工場の技術を生かした点滴チューブである。だが同じ医療器具といっても、点滴チューブと人工心臓ではレベルが違いすぎる。「先生、それは僕には難しいですよ」

困惑する筒井夫妻に、医師は熱っぽく説いた。「十年も研究すれば、佳美さんのための素晴らしい心臓ができるかもしれ

れません。できなくても、業界の発展のためになります。たとえ、業界のためにならなくても、こういう分野に筒井さんがお金を使いきった、ということであれば、お二人も満足いくんじゃないですか」
その言葉は、筒井夫妻の心を強く打った。ほんのかすかな光を感じたのだ。佳美のために何かをしたくて、もがいてきたのである。こうして二人は人工心臓の勉強にのめり込んでいった。筒井は三十八歳である。

佳美は小学五年生になっていた。筒井家は浄土宗の檀家だったが、彼女の強い願いでキリスト教の洗礼を受けている。祈るような気持ちだったであろう。

二人はまず、電気、バイオから医療まで幅広い研究会を抱える「高分子学会」の講演会や研究会に通い、次いで「医用高分子研究会」へ

「お父さん、せっかくだくさんのお金を貯めてくれたけど、佳美ちゃんに全然使えなかつたね。あのお金を寄付しませんか。佳美ちゃんのような子供の治療を研究する施設なんかに」

父親としては、「そうか、そういうよ」と言いたかったのだ。だが実業家の筒井が「うーん」と生返事をさせた。

「この人は寄付なんか嫌なんだろうなあ。」

陽子はそう思った。

一方の筒井は、(汗水をたらし、多額の借金を消してきた、カネの亡者のように生きてきた。そう急に言われてもなあ)と考えている。

二、三か月間、ずっと考え、佳美の透き通った顔を見ていた。そのうちに、(会社は順調にいつてるし、遊興三昧に使うカネでもなし、やっぱりこの金は寄付しよう)と内心で

の入会を薦められた。東京大学などで開かれる勉強会に二泊三日で行ってみると、化学者や工学者、臨床家、工業技術院の博士たちが二十人ほどで激論を交わっていた。

「そんなことでは、そうはならん!」「いや、そうなんです」

黒板の前で専門用語が飛び交い、実にやかましい。その中で、筒井の耳に、「インビトロ(in vitro)」という言葉が残った。もともとは「試験管内で」といった意味で、試験管や培養器などの中でヒトや動物の組織を用いて、体内と同様の環境を人工的に作り、薬物の反応を検出する試験のことを指す。筒井は隣の参加者に、「インビトロってなんでしょか」と尋ねた。後で聞いたら大阪の工業技術院の先生である。

「何かを体内に埋め込んでやるのをインビボという。その時に変なものが付いたとか、血液はつかかなかつた

とか、細胞がついちゃったとかそういうのがあって」

「そうですか」

「その反対にインビトロというのが出てくる」

「それって何でしょうか」

「インビトロは、試験管の中に血液を入れてこの切片を入れて振ると、この中で……」

聞けば聞くほどわからない。イロハのイとは何ですか、と尋ねているようなものだ。それでも教室の後ろでぼそぼそ食い下がっていると、先生たちが振り返る。「おかしなやつがおるなあ」

——聞いとも分からへんし、隣に聞いても邪魔になる。

そこで翌日の昼食時に最後に教室を出る人を捕まえた。

「すみません、昼飯おごりませんで、ちょっとここを教えてくださいませんか」

ど、こんなところで十分や二十分で教えられない。私はこういう者なので、私の教室に遊びに来なさい」

そうしてもらった名刺には、偶然にも東京女子医大とあった。名古屋名物の納屋橋まんじゅうを買ってその研究室に出かけ、一から教わった。あんなに勉強した時期はない。

動物実験室にも妻と頻りに顔をだし、初めは「変な素人が来た」と言われていたのが、仲間の列に加えてもらった。高分子学会では最終的にフェローの称号まで授与されている。

ベンチャー魂に火がついた

二年ほど過ぎた一九八一年、研究助成金をもらうために、工場の隅に「東海メディカルプロダクツ」を設立し、動物を使って人工心臓の実験をするところまでこぎつけた。

だが、八億円も使ったというの

すると、声をかけられた相手が、あんな誰ですか、失礼じゃないか、と怒り出した。

「昼飯をおごるからって、冗談じゃない。第一、私は弁当を持ってるか、昼飯なんておごってもらわないでいいんです」

——ああ、しまった。ここを教えてください、ちょうどお昼だから食事でも行きませんか、と言えば良かったんだ。

筒井は、ああいう科学者は本当に貧乏して、なかなか昼飯も食えんのですよ、という話を小耳にはきんでいた。それで、「タダで教えてもらってはいかんで、昼飯でもおごるかな」と思っていたのだ。

険悪な空気が流れ、これはもうあかん、と謝って、二、三步進んだところで、

「きみ、きみ」。振り返ると、「きみ、何が分かるんだ。私は弁当持

に、人間に使うにはまだその一千倍以上の資金と医師らの協力が必要だといわれ、泣く泣く東京女子医大の教授のもとを訪れた。

「先生！ 私もうやめざるをえません。売り上げはないし、カネが続きません」

「筒井さん、これはやめたらいかん。せつかくここまで来たのに」

「お金が用意できません。借りまくって、これ以上はできないんです」

泣きたかった。悔しいのはこちらの方なのだ。だが、その後のやり取りで筒井のベンチャー魂にまた火がついた。

「人工心臓やめて、次なにやるんだ」と言われて、思わず、「I A B Pカテーテルをやります」と言ってしまったのだ。

I A B P (大動脈内バルーンポンピング)カテーテルは、心臓付近の大動脈内で拡張と収縮を繰り返して

ってるから、昼飯はいらないが、どこが分からないんですか」

この機会を逃したらいかんと、筒井は恥も外聞もなくまた戻って尋ねた。相手は「ああ、それはね」と専門用語をべらべらとまくし立てる。

「よけい分かりませんが」

「あんだ、どこの大学の人ですか」

「私、関西学院大学です」

「関学に医学部とか工学部ってありましたかね」

「私、経済の出なんです」

「君、研究室、間違ってますよ。経済学部は向こうにまっすぐ行って、二本目か三本目を右に曲がって、三つか四つ目のビル。あっちが経済学部ですから」

そんな話の末に、「違うんです」と、相手に佳美のことや人工心臓の話打ち明けた。

「それは大変だ、教えてあげるけ

心臓の働きを助ける、細い管状の医療機器である。先端に細いバルーンがついていて、大腿部などから体内に入れて心筋梗塞の救急医療や脳梗塞の治療に使う。

「そんな筒井さんにできるわけないよ。教授は言った。当時は米国製しかなく、日本人にはサイズが少し長すぎて医療事故を起こしていることを、筒井は知っていた。開発には高度な技術がいるが、人工心臓の研究で学んだ知識と筒井の樹脂加工工場のノウハウを生かせることもわかっていった。

——うちの会社は、ホースやパイプのような長いものばかりを造って来た。機械や原料は違うけど技術は応用できる。

「それに」と筒井は思っていた。

「うちは親父以来、伝統的なベンチャー精神でやってきたやないか」

(文中敬称略、次号につづく)